



つくほ治療院新聞

通巻16号

鍼灸術は医療である!!

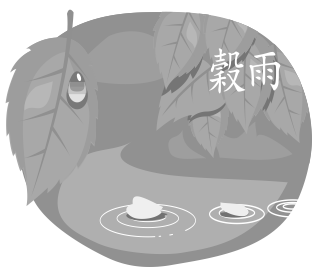
4月といえばスタートの時期ですが、鍼灸師もこの頃に誕生します。例年2月の最終日曜に全国で一斉に国家試験が行われ、3月下旬に発表されます。合格者は手続きを行います。4月中旬に厚生労働大臣から免許状が届いて、晴れて鍼灸師となるわけです。一般的には鍼灸師と言いますが、実際は「はり師」「きゅう師」と分かれています。しかし、授業内容や試験問題が重複している部分が多いため、多くの人は同時に取得することになります。千年以上続いてきた鍼灸術ですが、明治44年に内務省より営業取締りが制定され、昭和22年に国家資格の身分免許が与えられました。昭和63年に、都道府県知事が管理していたものが、当時の厚生省に変更になりました。平成5年に全国一斉試験が行われるようになり、今年で18回目を迎えました。最近では養成学校の増加に伴い、鍼灸師の数は急増しています。が、働く場所の増加は乏しく、鍼灸師としてではなく、医療従事者として整体院やクイックマッサージの無資格者と同等に働くのが現状です。整体や

二十四節季

穀雨

(こくう)

旧暦三月辰の月の中気で、新暦四月二十日ごろです。このころの春雨は田畑をうるおし、穀物の成長を助けます。



カイロは民間資格ですから医療行為は出来ません。鍼灸師は医療行為として自分で診断して自分の判断で治療を行うことを認められた医者と同様の立派な資格です。ですから保険診療も同等に認められれば、病気の予防になり財政難は回避できるのですが、病人が減ってしまうと医師や製薬会社が困ってしまうので、認めてもらえないという矛盾があります。まだまだ認知不足です。世間に医療と認めてもらえるまで、はり師きゅう師として頑張り続けます。

はり師	受験者数	合格者数
第1回(H5)	2363	2098
第5回(H9)	2689	2114
第10回(H14)	2645	2237
第15回(H19)	5275	4068
第17回(H21)	5354	4216

『平凡な中に真理はある』

単調な日常生活を考えて、つまらなく感じる人もいますが、本当によいものとは繰り返しに耐えうるものだと思います。名画は何度鑑賞しても、新鮮な感動を与えます。ニュートンは、リンゴが落ちるのを見て、引力を発見したといわれます。何千、何万回と繰り返し返されてきた、平凡な事実の中に真理は秘められているようです。現代は表面的な目新しさばかりを追い求め、単調な中にある奥深いものに気づきにくくなっているのではないのでしょうか。

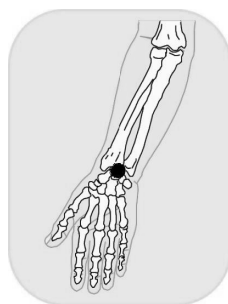
私たちも、キョロキョロと目先の新しさに振り回されるのではなく、単調な毎日の中にある真理を求めながら、底光を発する人生を築けるように生きていきたいものです。

「一日一話」より

大陵

(だいらりょう)

「大」は崇高、「陵」は高くそびえている丘の意です。このツボは手首の関節の手の平側にあって、2本の腱の間にあります。肘から手の平に降りていくと手首を越えた所が小高い丘に似ていることから大陵と呼ばれます。心痛・動悸・胃痛・嘔吐・胸悶・胸脇の痛み・失眠などに効果があるとされています。



4月の定休日

○印はお休みです

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	



「機能性ディスペプシア」

あまり聞き慣れない病気だと思いがすが、これは、新しい病気ではありませんが、胃の検査をしても異常が見当たらないのに、胃の働きが悪くなり、胸やけ・食欲不振・膨満感・胃もたれ等の上腹部の症状を現わすものをディスペプシアと呼びます。このような症状が慢性的に続く時に機能性ディスペプシアと呼びます。

これは①半年以上前からの症状 ②最近三カ月で、胃もたれが週に数回、またはみぞおちの痛みが週に一回以上

③持続的ではなく間欠的症狀が続く ④検査をしても異常が見当たらない時に診断されます。

原因は、はっきり分かっているはいませんが、胃の運動機能障害・知覚過敏・ストレスが考えられます。治療は、十分な睡眠・食生活の改善・ストレスの軽減・禁煙などの生活習慣の改善。胃酸を抑える薬・消化管運動機能改善薬・抗うつ薬を用いた薬物療法などがあります。



院長の独り言

また医者が病気を作りました。医学の進歩のお陰か患者獲得のためかは分かりませんが、今までは患者さんが症状を訴えても「検査で異常が見つかりませんが、今までは患者さん」で片づけられていたものが、急に病名が付き治療してもらえないようになりました(おそらく治療法は以前と変わりはないと思いますが)。異常というのは炎症があるかどうかです。このように炎症という敵があれば、西洋医学の真骨頂!? 敵をやっつけるという図式が成立しますが、働きが低下して表れた症状には炎症がないので治療法がありません。以前から検査で異常があるうがなかるうが、患者さんの症状に目を向けて治療に取り組んできた東洋医学では、働きが低下したものを補い高める治療方法があります。やっとな西洋医学も追い付いてきました。このような状態を東洋医学では「未病」と言います。健康と病気の間のグレーゾーンの事で、胃の不快感の他に、倦怠感・頭痛・めまい・肩凝り・手足の冷え・不眠など様々な症状を自覚します。まだ病気になる前段階のSOSサインを放っておくとやがて本当の病気になってしまいますから早めの治療をお勧めします。もう病気になるまで、原因も治療法もはっきりしている時は、是非西洋医学も頼って下さい。

《連載》東洋医学講座

肺臓の生理

肺と言ったら、呼吸との関わりをイメージ出来ると思います。これは、西洋も東洋も同じです。しかし、やはり働きに違いがあります。鼻や口から空気を入れて、肺で酸素交換して吐き出すだけではなく、東洋医学では、取り入れた空気(空の気)は、肺で衛気となり体表面を巡り体を守ってくれます。

普段健康な時は問題ないのに、風邪をひきそうな時にくしゃみをする、背筋がゾクゾクしていませんか? これは、肺気⇨衛気が足らなくなっている状態です。体表面を守られていないので、外界の寒邪が簡単に体の内に入って来ようとしています(背筋の辺りに風の門と書いて「風門」というツボがあるのも昔の人って凄いですね)。その風門から風や寒の邪が入って、風邪をひくわけです。という事は、日頃健康でも治療して衛気の働きを良くしておくことと風邪の予防につながるって訳です。



運動すると汗が出ますが、汗をかくのは、汗腺を開閉する事ですので、衛気の働きを活発にします(⇨腠理の開闔)。秋に運動するのが良いと言いますが、これは、体内にある夏の暑気を発散すると同時に、夏に開きやすくなった腠理⇨汗腺を活発にして、冬の寒気に応じた体表面を作る目的になるからです。春も秋も気候的には、あまり変わりませんが、体からすると大きな違いがあるんですね。

医食同源

ニラ

胃腸を温めて、働きを活発にし、胃もたれ、嘔吐、つわりなどの症状を緩和するとされます。粥や吸い物、お浸しなどにして食べるとよいとされ、血行をよくして全身を温め、胸のつかえや痛み、冷え、打撲によるアザ、痔の症状などを改善するとともに、疲労を回復し、精力を強めるとされます。また発ガン抑制の働きがあり、ガン予防にも効果があるとされます。

執筆余話

鍼灸は医療だということで、月刊ぶらざ四月号「病院・医院特集」の中に掲載する事になりました。ぶらざの営業さんに、整体やカイロとは違って、鍼灸は医療なんだから、美容・健康じゃなく、病院・医院に入れてお願いしました。技術研鑽はもちろんですが、普及啓蒙にも力を入れて、まずは、つくばの皆さんに認めてもらえるよう頑張ることが自分に与えられた使命だと思っております

